

- ★雪害調査報告
- ★林業危機の出口を考える
- ★日田市役所林政課誕生
- ★森林経営の実態と今後の経営方針

林試 だより



佐寺原 '87 初夏

((((((((((((((((((((フォト))))))))))))))

2月4日未明、日田地方を中心とした一帯は湿雪にみまわれ、多くのスギ林で被害が続出した。被害面積1,020ヘクタール、被害金額3億2千万円に達した。

雪害調査報告

= 雪害は忘れぬうちに やって来る =

今春も日田地方はまた湿雪にみまわれ多くの山林で被害が続出しました。思いおこせば昭和43年および53年にも今回と同様の被害にみまわれており、雪害はほぼ10年サイクルで起っていることとなります。

今年の雪害は、2月4日の未明に起りました。丁度この日は春の到来を告げる立春の日にあたっており、皮肉といえば皮肉なめぐりあわせでもありました。今回の被害地は日田市、天瀬町、大山町の低山地に集中して生じていますが、このほか山国町や玖珠町の一部にも見られました。被害面積 1,020 ha、被害額は3億2千万円に達するとされています。

この被害の状況にかんがみ、県日田事務所林業課と共に、その実態を明らかにするため3月上旬、日田市を中心に計82ヶ所のスギ林について被害調査を実施しました。

調査の結果大略次のようなことが明らかとなりました。

1. 品種により被害形態が異なり、ヤブクグリでは根曲り、幹曲りが、ヒノデ、クモトオシ等の品種では幹折れが主体となっています。これはそれぞれの品種のもつ材質特性の違いにより生じる現象と考えられます。

2. 海拔高でみた場合、250m以下にある林分が大部分を占め、今回の雪害が低山型であったとされるゆえんです。ちなみに昭和53年の際は350m内外が主体でした。

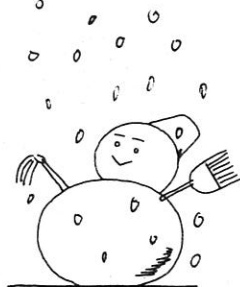
3. 地形的には、谷筋や山腹下部で被害が目立ちました。とくに凹型地で被害は激しい傾向を示しています。またヤブクグリの根返りは30度以上の急傾斜地に発生が多いことが

認められました。水田跡造林も根返りが多くこれは盤層の存在が影響しているのではないかと考えられました。

4. 林齢別では16～25年生の要除間伐林にしかも除間伐なしの粗放林に激害地が多いことが認められました。また過去1年以内に間伐を実行した林分での被害も以外に高いことが指摘されました。

5. 胸高直径の大きさでは15～18cmの径級で最も被害度が高く、それが23cmを越える林分では、被害の少なくなることが認められました。

雪害は、局地性が強く働きます。今回雪害を受けなかったからといって、これからも受けないという保障は100%ありえません。要除間伐林を多くかかえた湿雪地帯では、常に雪害にそなえた山づくりが要求されます。今回の教訓として、林齢が高くなり、径級が大きくなれば、雪害は少なくなるという結果が得られています。形状比の低い林分造成も効果的と考えられますが、どの山をみても形状比は高いようです。これを尋常の手段で低めることは容易ではなく、形状比の低い林分を作るには、現在の保育技術体系を根本から変えねば不可能に近いと思われます。とすれば、現在ある山に対しては間伐を強力に推進し、くり返し実行することで、少しでも早く径級の大きい木へ育てあげるのが今のところ第一にとられる方法ではなかろうかと考えられます。特に径級15～20cm内外の時期をいかにうまく乗り切るのが肝要と思われる。なお、蛇足ながらヒノキは雪害に対してきわめて強いということが改めて認識されたのも今回の雪害の大きな教訓でした。



(育林科・諫本)

林業の現場から

林業危機の 出口を考える

指導林家 田中 晋

林業は最近特に厳しい不況で、一般材生産の林業経営は成り立たなくなった。果して林業経営が我が国で成り立つか、山村住民にとっては重大な問題である。日田地域において林業は地域経済を支える大きな柱であることから、県はグリーンポリス構想を、日田市は新たに林政課を設置して林業施策の充実強化を進めている。林業不振とは反対に国民の森林と緑の重要性認識の気運が高まりつつある時だけに、林業に携わる者としては林業危機の出口を求めて頑張らなければならない。

どうすれば林業経営が成り立つだろうか、根本的には国の林政の見直しなど多くの問題があるが、私たち個々の林家がしなければいけないことは、過去の施業を反省し、無駄をはぶき省力化を考え、儲けることより損をしない知恵を出すことであり、反省すべき問題点として以下のことが考えられる。

1. 皆伐後の再造林は、できる人は別だが、造林資金の借入金で行っているのは一般材生産は成り立たない造林できる時期の到来を待つて行く。
2. 皆伐をさけ長伐期に移行する。
3. 林道、作業道の基盤整備は重要だが簡易作業路を考える。
4. 特殊材生産を考える。
5. 植栽品種の特性に応じた施業をする。
6. 集約施業は技術がないと賃金高で経営難が予想される（自家労力施業は除く）。
7. 二段林などの複層林施業は省力にはならない。
8. 間伐遅れの過密林が一番損が大きい。

問題点として取り上げた中で、2の長伐期施業について考えてみると、長伐期施業では

大切なことに間伐があるが、今までの短伐期施業では少しぐらい過密でもあまり問題にされなかった。そのために過密林を美林と誉める風習があるが、このような考え方では長伐期施業は失敗する。長伐期施業には長伐期施業の技術があり、厳密にいうと生産目標や品種などで一様ではないので、今回は、造林面積の多いヤブクグリ（インスギ）の一般的な長伐期施業について述べる。

ヤブクグリは品種の特性上枝の枯れ上がり早く、枝の枯れ上がり過ぎを嫌う品種である。また、本来ヤブクグリの幹は末細のドンコ木で、完満になると健全な生長ができなくなり冠雪害を受けたりする。小径木では銭にならないから間伐をして大きく育てるのが賢いやり方である。標準植（3,000本/ha）の初回間伐は元枝打ちの頃不良木を伐採して残りを1,500本/ha程度にしておけば初期の冠雪害を避けられ以後の間伐が楽になる。間伐の目安は樹高に対する枝の枯れ上がり割合で決めるのがその林分が一番正しい方法である。枝の枯れ上がり過ぎと間伐後の回復は樹齢によって差があり若いほど良く30年頃を境に悪くなる。長伐期の直径生長を望むなら30年生時の枝下高を樹高の半分程度とし、以後は下枝の枯れないように間伐すれば、目づまりを起こすようなことはなく大径木へと生長を続ける。林試日よりNo22に「ヤブクグリの疎植無間伐で経過した65年生林分を調査して」が特集で記載されていたが、この記事中の円板の年齢の形成状況から推測すると、35年で間伐を必要とし、40年では遅すぎることを、また44・45年の皆伐で程良い立木本数であったことを、この円板は教えている。今一度この記事の検討をお勧めします。

間伐の重要性を知り、取り組んでおられる方々を訪ねることも勉強になろうかと思いますので、以下に実践者を紹介します。

耶馬溪町大字金吉 田代 和芳氏
玖珠町大字古後 宿利 友喜氏

林政事情

日田市役所林政課誕生=今後の対応について

林政課長補佐 田中力夫

我が国の農林業情勢は、経済摩擦から端を発し加えて最近の急激な円高傾向の中で益々混乱の度を増している。

農業関係にしても、それぞれの自治体が暗中模索の中で「村おこし事業や一村一品の特産品作り」等活性化の糸口を見出すための懸命の自助努力がなされているが、本年は農政改革の年とも云われるように水田再編対策いわゆるポスト三期対策や食管制度の見直し等々厳しい農政事情となっている。

一方林業においても、一昨年水源税、昨年の森林・河川緊急整備税と言った論議の中で森林の持つ機能として、国土の保全・水源涵養及び国民の環境保全形成等々公益的機能を含め多面的な森林体系の要請がなされており、新たな森林・林業の活性化の具体的施策の推進を図ることとされているなど農業林業ともに構造的な不透明不確定要素を持っている。

こう言った状況で日田市における農林業は総面積 270.78 km^2 の中で86%を占め、戦前戦後を通じ日田市経済の中で農林業が基幹的産業として主体をなして来たわけであるが、昨今の社会経済の推移や産業構造の急激な変化により経済の中で占める割合は低下している。しかしながら本市における農林業は今後とも基幹産業であることに変わりないと云うより、この豊富な資源を活す創意工夫の中で1.5次産業へと附加価値の高いより効率的な経営効果を高める方向を住民ともども考え意識改革を図る必要がある。

当然行政としても農林業の転換期に当り住民の農業・林業に対する多岐多様化する要請等も勘案する中で専門的組織の確立を図る必要から従来の農林課を農政課・林政課にそれ

ぞれ独立し、よりの確な事業の把握と機能性を持った事務処理を行い、加えて「日田林業」のイメージアップを内外に示し併せてグリーンポリス構想の積極的な推進を図る必要がある。

今後における林産業の動向は、木材需要の停滞・木材価格の低迷・林業経営費の増高等から林業木材産業は極めて厳しい状況におかれており、森林の保育・間伐等適正な管理が懸念される。

当日田市においても国県の林業振興策に呼応し現今の厳しい林業情勢の中、特に外材輸入の増大による日田材市場の狭隘化・林業経営コストの増大・林業従事者の高令化など極めて厳しい状況にある。加えて全国の林業地との産地間競争の激化、特に本市においては内陸型製材地帯であり且つ品質においても特定銘柄を持たないと言ったハンディを抱えている。当然将来日田林業の活性化の強力なインパクトになる施策の展開が必要である。

以下基本的施策として、①長期的視野に立脚した林業基盤の整備……昭和62年度より林業施策の見直しとして林業振興地域整備計画の策定を行い充分な資源を活かした森林林業の動向を踏えた「山作り町作り」の長期的構想を策定する。

②日田材の需要拡大特に日田材のブランド製品の開発……日田材の優れた特性のアピールと製材品の大量安定供給と併せて新たな商品の開発として日田杉の家及び日田材集成加工組合の設立によるマーケティング活動の推進。

③老令化が進んでいる林業従事者の後継者育成対策……低コスト林業の対応からグリーンマイスター、林業研究家グループの育成等々基盤整備のあり方及び林業技術を有する労働力の対策強化。④森林資源の経済的経営と多面的機能の活用……多様化する森林ニーズに対応する総合的な機能を発揮する森林の造成と広葉樹林・優良太径木の生産を含めた森林体系の整備と併せて林道網の面的整備を図る必要があり、より公益的機能の高度な発揮へ

の対応。⑤林業情報基地と林業研修機関の設置……日本有数の林業地として又、九州横断自動車道の供用開始と相まって森林資源の多面的機能をより発揮し、既設のNTT及びキャプテンシステム等の相互活用を含め林業情報基地と林業関連の総合研修機関の設置を図

り関係団体機関が一体となつての日田林業の新たな活性化を図る。

以上が基本的政策として掲げているが具体的に今後とも関係者皆さんの一層のご支援協力をお願いする次第であります。

技術コーナー

＝森林経営の実態と今後の経営方針＝

日田林業地の森林経営に関するアンケート調査

＝その5＝

13. 木材の販売目的

過去3年間（昭和56～58年）に木材を販売した目的についてのアンケート調査では、販売代金の用途が多岐にわたっていることから複数解答を求めたため、解答件数は解答者数を大きく上回っております。全体で322件の解答が寄せられ、最も多かったのが「食費など日常家計費」で24%、続いて「山林保育費」14%、「借金の返済」、「家屋の新・増・改築」9%、「子弟の教育費」9%、「耐久生活用品の購入」8%の順であります。

林業関係の用途では、山林の保育費、相続税など税金の納入、林道などの負担金、山林の購入、シイタケ生産拡大などで全体の23%でありました。

14. スギの伐期齢

過去、現在、将来のスギ伐期齢について調査した結果（表－1参照）、過去は

36～40年生が最も多く31%を占め、平均伐期齢は41.7年でありました。現在では41～45年生が22%で最も多く、平均伐期齢は45.7年と過去より4年延長されています。将来計画では、46～50年生が最多で20%を占め、平均伐期齢は50.6年となり長伐期化されて行くようであります。

現在の伐期齢に対し将来伐期を「短くする」は3%「現状どおり」が42%、「長くする」が55%であり、「長くする」と回答した林家が半数以上を占めていました。

所有規模別で「短くする」は20ha以下の林家であり、「現状どおり」は100ha以下の林家で大差なく30%台であるが100ha以上の林家では67%と3戸に2戸は現状維持と言うことでした。伐期齢を「長くする」という林家は100ha以下の所有規模で半数を占め所有階層別の差はあまりみられないようです。

（経営科・安養寺）

表－1 林家別スギの伐期齢および今後の方針

区分	回答 林家数	伐 期 齢																平均伐 期 齢
		30～35		36～40		41～45		46～50		51～55		56～60		60以上		その他		
		林家数	比率	林家数	比率	林家数	比率	林家数	比率	林家数	比率	林家数	比率	林家数	比率	林家数	比率	
過去	166戸	33	19.9	52	31.3	29	17.5	23	13.9	8	4.8	7	4.2	5	3.0	9	5.4	41.7
現在	126	12	9.5	26	20.6	28	22.2	22	17.5	14	11.1	10	7.9	9	7.1	5	4.0	45.7
将来	174	6	3.4	23	13.2	23	13.2	34	19.5	25	14.4	24	13.8	35	20.1	4	2.3	50.6
所有規模別の今後の伐期齢	所有規模	短かくする		現状どおり				長くする				無回答				計		
	1ha未満	—	—	1	12.5	—	—	7	87.5	8	100							
	1～5	1	1.5	6	8.8	10	14.7	51	75.0	68	100							
	5～10	1	2.4	5	12.2	12	29.3	23	56.1	41	100							
	10～20	2	5.7	10	28.6	12	34.3	11	31.4	35	100							
	20～50	—	—	10	27.8	13	36.1	13	36.1	36	100							
	50～100	—	—	7	35.0	12	60.0	1	5.0	20	100							
100ha以上	—	—	10	52.6	5	26.3	4	21.1	19	100								
	計	4	1.8	49	21.6	64	28.2	110	48.5	227	100							

研修報告

=植物組織培養の基礎技術=



組織培養の基礎技術の習得を目的として、61年11・12月の2ヶ月間、茨城県にある国立林業試験場組織培養研究室で研修を受けてきたので報告します。指導教官には同研究室研究員の佐藤亨先生にお願いし、培地の作成、殺菌処理、植込み等基礎技術について勉強しました。以下、組織培養の基礎技術について報告します。

1. 培地の作成・分注・滅菌

植物の組織培養に用いる培地は一般に主要無機成分、微量無機成分と糖を基本成分にホルモンやアミノ酸類を添加したものが用いられます。通常、これらの成分は貯蔵液としてあらかじめ作成しておき調整時にうすめて使用します。調整された培地はPH調整を行い、寒天を加えて煮沸融解後分注し、オートクレーブで121°C、15分間処理を行い培地を完全に無菌化します。

2. 材料の準備、殺菌

材料は、成木の腋芽や若い実生苗、種子胚等から得ます。これら材料は雑菌によってかなり汚染されているので、無菌化するため70%エタノールやアンチホルミン等で殺菌処理します。殺菌時間は材料により異なりますの

で適切な処理時間をつかむことが重要です。また、材料は雑菌による汚染が少ないものを選ぶ必要もあります。

3. 培地への植込み、培養・増殖・発根

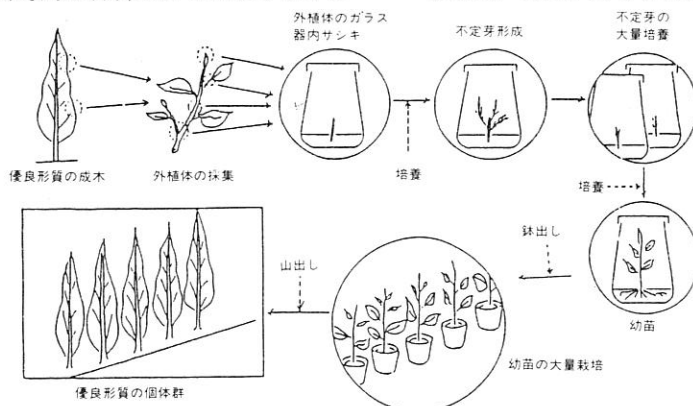
培地への植込みは、無菌状態に保たれているクリーンベンチ内で行います。無菌状態とはいっても作業中に雑菌の混入の恐れがあるのでできばきとすることが肝要です。作業終了後は培養室で培養し、多数の不定芽を出させてそれを切り取り発根培地に植えかえて大量の植物体を得ます。

4. 馴化

得られた植物体は、そのまま自然環境に戻すと雑菌に犯されたり、乾燥にやられたりして枯死してしまいます。このため、馴化の過程で自然状態に慣していき、完全な植物体にします。

5. 最後に

樹木を対象とした組織培養の研究は日がまだ浅く、成功例も少ないようです。国立林試や各県林試でもクヌギ、ミズナラ、コナラ等を対象に研究が進められていますが、雑菌や植物体の褐変枯死等まだまだ乗り越えなければならない課題があります。（保護科・高宮）



クローン増殖の手順（斎藤 明氏による）

質問コーナー

ニュートラル栽培とは？

Q：質問 A：答え

Q. 最近、シイタケのニュートラル栽培が盛んになっていますが、一口に言って、どんな栽培法なのでしょう？

A. ニュートラル (neutral) とは、車のギアのNと同じで、中立とか、中間という意味です。秋から春の間の厳寒期に人為的操作を加えて、良品を作ろうとする栽培法です。また、裸地からホダ場へ移す途中で水田等空地で栽培するという意味もあるようです。

Q. 具体的には、どういった栽培を行うのですか？

A. 春子の場合、冬の低温刺激を受けたホダ木から、雨のたびにシイタケの発生が見られますが、厳寒期では、低温と乾燥のため

にシイタケは、十分に生長することができません。この悪条件を人為的操作 (ビニールトンネルやハウスによる被覆やスプリンクラーによる散水等) を行って克服しようとするものです。シイタケの生長にとって、最もよい条件を与えてやることにより厳寒期に早採りすることを目的とします。この場合、散水によって水分の供給を行いますので、自然の降雨の影響を受けず、日和子のドンコ、コウコの採取ができます。

Q. 逆に栽培上の問題点はありますか？

A. シイタケ栽培は、自然の気候条件に大きく左右されてきました。環境に栽培者の方が合わせてきたわけです。このニュートラル栽培法では、環境を栽培者が創り出さねばなりません。芽切りや生長時の温度管理散水の時期や量等に細かな問題が残されています。(特用林産科・野上)

山を



歩けば

シダ (6)

山菜と呼ばれるシダとして、前々回、ゼンマイを取り上げましたが、三大食用シダをあげるとすれば、そのほかにワラビとクサソテツがあげられます。クサソテツは、九州ではあまり馴染みのない植物ですが、北陸から北では自生も多く、コゴミの名で山菜の王とも呼ばれています。北アメリカにも分布し、シダを食べる風習のほとんどないアメリカにおいてもこのシダだけは高級レストランのメニューに名を連ねています。九州には少ない植物ですが、大分県内には比較的広く分布しており、九重町などでは良く見かけます。しかし、野草を食べる習慣の少ない九州地方での例に漏れず、利用されている例はあまりないようです。食用にされる部分は、ワラビやゼンマイと同様春の芽だちですが、1 m以上に

もなる草で、群生するため、量としてもかなり採取できますので、見つけたら利用してみるとよいでしょう。また、強い草ですので、庭に植え放して置いてもどんどん殖えます。夏の暑い時期に淡い緑色の葉が風にそよぐ姿は涼を誘うものがありますから、花も団子もというところで庭に植えてみてはいかがでしょうか。(経営科・佐藤)

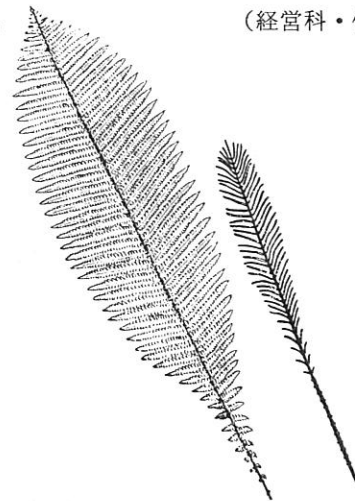


図. クサソテツ 裸葉 (左) と実葉 (右)
「伊東洋「シダ」1973, 北陸館より」

シリーズ 木のはなし

カヤの巻

(Torreyia nucifeva)

これまでの林業解説シリーズ（木材の組織）では木材を顕微鏡写真で観察してきましたが、木材の複雑な構造を知ることができたのではないかと思います。

そこで、今回からは木材の色々な性質を特殊な用途に使われる木材を例にして考えていきたいと思っています。

カヤはイチイ科の針葉樹で、本州中南部・四国・九州に自生しています。名前の由来は根や枝葉を蚊遣りに使ったからというのは俗説で、古名のカエからカヤにかわったと言われています。また、漢字で榧と書きますが、榧は本来シナガヤのことを言います。

カヤの果実は食用にしたり、種子から油をとって利用されますが、現在ではあまり見かけません。

さて、カヤの用途には、建築材（床柱・縁板・浴室・土台など）・仏像などの彫刻材・器具材（風呂桶・そろばん玉・数珠・くし・かさの柄など）・家具材・船舶材・土木用材などがありますが、最もおなじみになっているのは碁盤と将棋盤ではないでしょうか。

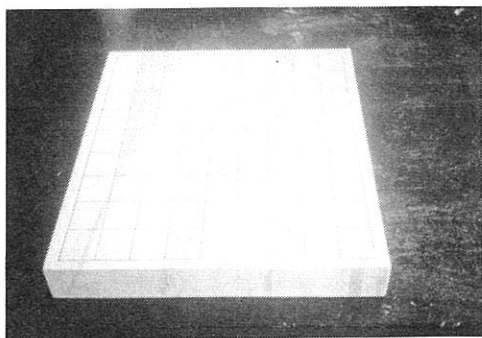
「木材の工芸的利用」という本には、

「かや製ノ盤ハ一種ノ香気アリ光沢ヲ生ジ汚レ目付カズ盤上ニ基石ノ音ピチピチトシテ快ク且ツ夜間ニモ盤面ノ罫線分明ナルノ長所アリ殊ニ日向産ノかや材ハ木理細カクシテ材色最モ宜シク何時ノ塗料ヲ施スヲ要セズ」

と記されており、碁盤に最適の材とされています。カヤ以外にはイチョウ・カツラが使われますが、一部ではヤナギ・トチノキ・ヒノキ・カエデ・モミが用いられることもあります。

次にカヤを使った建物で有名なものに国宝に指定されている富貴寺があります。当時（平安時代）国東地方にカヤの大木が多かったこともあると思いますが、加工性が良いことや材色がおだやかで独特の香りを発するため、古くから仏教用の木材として重宝されていたことが考えられます。また、カヤは保存性が高く、とくに水に強いことから建築用材でも水回り部分とか船材料とかに使われています。

ところでカヤと似た名前にイヌガヤという木がありますが、果実が臭いことや食べられないことでヘボガヤとかヘダマとかあまり聞こえの良くない別名もっています。以上でカヤの巻を終わります。（加工科・津島）



情報コーナー

森林の崩壊防止機能と保全的森林施策

良い森林が崩壊を防ぐことは、昔から知られており、広い山地全域の崩壊発生の防止には森林の崩壊防止機能の活用は欠かすことができない。しかし、森林の崩壊防止機能は伐採、造林など森林の状態の変化に応じて絶えず変化している。

国立林業試験場防災部の秋谷孝一氏によると、崩壊防止を考慮した保全的森林施策のあり方として、単木択伐において、択伐後の材積がヘクタール当たり 150 m³あれば良く、水平帯状択伐においても、斜面方向で通算した残存木がヘクタール当たり 150 m³あればよい、と述べられている。

(林業試験場場報 No.273, 4-5, 1987)

早ばつに対する植物の生化学的適応

植物ホルモンの一種であるアブサイシン酸 (ABA) には気孔を閉じさせる作用があり、耐旱性の強い植物は通常の植物よりもこのホルモンの含量が多い。水分欠乏状態になった場合、ABAが急激に増加するが、水が供給されると、もとのレベルに低下する。ABAを外部から与えることによって、蒸散量を減少させることが可能である。この他の生

林業用語 LD50

急性毒性を示すことば。一群の供試動物にその薬剤を与えたとき、その50%が死ぬ薬量で、ふつう体重1kg当りmgの単位で表示します。したがってこの値が小さいほど毒性が強いということになります。その毒性の強さで「毒物及び劇物取締法」によって毒物または劇物に指定されるもの、あるいは普通物として特に取締の対象にならないものもあります。農薬はたとえ低毒性のものであっても生物に害を与えるものですから施用に際しては十分注意することが必要です。

学的現象としては、水ストレスにかかった植物が、その適応の過程でプロリン (アミノ酸の一種) を集積することがあげられる。オオムギではプロリン含量の増加は大変規則的であるため、プロリン濃度を耐旱性の程度を評価する際の目安に利用することができる。(ハルボーン: 化学生態学, PP.303, 文永堂, 東京, 1981)

サクラのてんぐ巣病

本病は、公園や並木のサクラに普通にみられる病気であり、世界的に分布し、サクラの名所が荒廃する原因の1つである。病原菌は *Taphrina wiesneri* (RATH.) MIX で枝の一部がこぶ状にふくれ、そこから不定芽が叢生していわゆるてんぐ巣になる。ソメイヨシノなど花が先に咲く種類では開花期に病巣部だけ葉をつけているので目立つ。サクラの種類によって発病程度に著しい差があり、ソメイヨシノ・コヒガンザクラは極めて弱く、エドヒガン・オオシマザクラは強い。防除法としては、病巣を枝の膨らみの下から切除し、あとにチオファネートメチル剤を塗布する。同時に樹勢の回復を図るようにする。(林業試験場関西支場研究情報No.3, Feb. 1987)

マツオウジを集めています。

種々の食用野生きのこの収集と菌株の保存を行っています。皆様のご協力によりすでにシイタケは100系統をこえました。

将来、栽培化の可能性のある種々の野生きのこの中に「マツオウジ」があります。松大父、松生子、または松旺子ともいわれます。玖珠地方、安心院地方では「カラマツタケ」ともいわれているようです。

初夏から秋にかけてマツの切株、倒木などに生えます。カサの色は淡黄色で褐色のりん片があり、かなりがっちりしたきのこです。マツタケの香りほどではありませんが、香り、舌ざわり、味もよいきのこです。

現在このきのこを探しています。神社や公園などごく身近かなところでも生えますので、みつけましたら是非ご連絡をお願いします。

県下の磨丸太生産の現状

第3回九州林業問題懇談会において「大分県における丸棒・磨丸太生産の現状について」の報告を行った。昭和61年の生産量は縁桁約4,700本、化粧丸太約3,300本となっていた。

	生産者名	所在地	開始年	特色・その他
丸棒	日田郡森林組合	中津江村	58	奥日田ログキャビン
	(有)瀬戸工務店	玖珠町	61	中空乾燥ログ
磨丸太	日田郡森林組合	上津江村	49	従業員数 17名
	日田市	日田市	61	共販所内
	湯布院町	湯布院町	57	湯がき丸太
	マルト木材 KK	日田市	55	銘木店
	矢幡林業	天ヶ瀬町	53	多角経営
	後藤英二	竹田市	47	天然シボなど
	安藤豊吉	臼杵市	52	焼杉丸太
福田彰	耶馬溪町	—	天然シボなど	

新 人 紹 介



林産部木材加工科
神田 哲夫 (34才)
(かんだ てつ お)

昭和28年玖珠生まれ。高知大学林学科木材理学研究室で学んだ後、段谷産業において木材の高度利用、特にLVLによる人工木に異常なる情熱を燃やしたこともあった。

一見ひかえめではあるが、とりつかれたような情熱をもっている氏の今後の活躍が楽しみである。日出事務所時代には知事表彰をうけた実績がある。



林産部木材加工科
亀井 淳介 (24才)
(かめい じゅんすけ)

昭和38年中津市出身。島根大学林学科木材加工学研

究室で日夜ソフトボールの研究に励んでいた。先日の試合では3番打者としての期待を裏切り、みごとノーヒットであった。

スマートな甘いマスクを持つが、どうも旧人類的性格をもつためか、只今恋人募集中である。ゴルフ、スキーを愛する大病院の御息子であるにもかかわらず金を全くもたない大型新人として期待されている。



庶務課
小野 タカ子 (42才)
(お の たかこ)

日田高校卒業後県に入り、今春の移動で、県日田事務所総務商工課より当林試庶務課へ。明るく行動的で早くも職場に溶け込み、その体格と性格のおおらかさはどっしりと安定した雰囲気醸し出している。

日田で生まれ育ち、今は中学生と小学生の一男一女の良き母であり、心身ともに若いおタカさんである。

— 人のうごき —

- 転出 62.5.1
主任研究員 川野洋一郎 国東事務所へ
主任研究員 後藤 康次 三重事務所へ
主 任 長尾洋子 日田土木事務所へ
- 転入 62.5.1
技 師 神田 哲夫 日出事務所より
主 査 小野タカ子 日田事務所より
- 新任 62.4.1
技 師 亀井 淳介

林試だより No.29
発行 昭和62年7月31日
編集 日田・玖珠・下毛地区林業試験研究連絡会
大分県林業試験場
大分県日田市大字有田字佐寺原
TEL. (0973) 23-2146-7
印刷 川原印刷/日田市上城内町1281-3
TEL. (0973) 22-3571